



TITLE:

田島先生を追慕す

AUTHOR(S):

黒正, 巖

---

CITATION:

黒正, 巖. 田島先生を追慕す. 経済論叢 1934, 39(2): 300-302

ISSUE DATE:

1934-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130474>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號 二 第

卷九十三第

行發日一月八年九和昭

哀 辭

故田島博士近影及署名  
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

## 論 叢

骨牌税に就きて

供給曲線の性質

## 時 論

輸出統制の諸問題

## 研 究

貨幣的景氣論史

金物價と貨幣價值安定

アダム・スミスの廉價即豊富論

## 記 事

田島博士逝く

故田島博士年譜及著書論文目錄

## 追憶文

織田 萬  
河田 嗣郎  
汐見 三郎  
谷口 吉彦

神戸 正雄  
本庄 榮治郎  
黒 正 巖

山本 美越乃  
小島 昌太郎  
田 島 順

財部 靜治  
大國 壽吉  
石川 興二

## 附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

る多い。殊に先生は御存じの通りの「酒仙」とさへいはれ、酒の歎美者であつた、私も聊か酒を嗜んだ。その關係からして私は先生の酒間に於ける行狀をよく知り、先生の面目の躍如たるものを常に見出し、痛快を禁じ得なかつたのである。

經濟學部が法學部から獨立した大正八年の秋、初めて同好會なるものが出來た際、私はクラス代表の一人であつた。同好會なる會名はその時、先生が命名されたのである。それから初めて同好會の旅行があつて、伊勢參宮を企てた。經濟學部長たりし先生に引率されて隨分澤山の學生が出かけ盛會だつた。その頃から私は常に先生の許に出入して御世話になつた。

## 田島先生を追慕す

黒 正 巖

田島先生忽焉として亡くなられた。思ひ出深きものが澤山ある。學問のことにつきての話はその人があらう。私は學問以外に先生の御指導を忝ふことが頗

大正十二年、私が伯林に居た時、先生が海外視察の途次、獨逸に入國された。先生は初めベルギーに居られたが、ハイデルベルヒに居た汐見三郎教授が、先生を迎へに來たので、先生は某伯爵嗣子と共にハイデルベルヒへ赴かれた。所が先生は當時仲々元氣で、昔の洋行氣分に若返へり相當に杯を舉げられたが、何分に

も相手が禁酒家の汐見博士である。大阪商科大学の藤田敬三教授も居たが、とても應接は出来ぬ。そこで丁度その頃、リッケルトの許で哲學を研究して居た三木清氏を傭兵にたのんで来て相手をして貰つたが、三木君は畑達の事として毎日といふわけにも行かず、遂に私の所迄援兵を乞ふて來た。その頃はまだ生活の餘裕のあつた頃だつたから、夜汽車で、一人ハイデルベルヒへ出かけた。汐見、藤田兩氏は勿論、田島先生大よろこび。ネツカールゲミュンデの古村ヘギリシヤの酒と稱するのを呑みに行つたり、街のビーアホールを呑んで廻つた。

伯林の連中は是非先生をつれて來いとの事故、歸途を急いで居られた先生を伴つて伯林へ出發する事になつた。出發の朝、ビクトリヤホテルで行李の用意をした所が、荷物がふえて一寸入りかねた。先生は同行の某伯爵嗣子に君のカバンに少し入れて貰へぬかとたのまれた時、某氏はよい返事をしなかつた。先生はこの某氏が大分手まとひになり閉口して居た時の事として、

例の持前の痼癢を起し、憤然として、「何だ、五萬石や十萬石のヘッポコ大名の息子が、これ位のものを入れるのが何だ。獨語も佛語も話せぬで、どちらがお伴か分らぬのに辛棒して連れて來てやつて居るのに、……」私は閉口してまあまあとなだめ、無事に伯林へ着いた。伯林ではその頃澤山の京大出身者が居り、大に歡迎した。先生は往年、第七天國で三ヶ年苦學力行した事を追憶され、當時の留學生の生活振りを見て、感慨に堪えなかつたらしい。昔、先生のよく行かれた所へ連れて行つてやるといはれ、大阪商大の小山田小七教授などと共に探し廻つたが、變化の少い伯林にも、それは變り果てゝ見つからなかつた。

私は毎朝早く下宿からライプチガープラッツの先生のホテル迄日參したが、その時實に感心に思つたのは、いつでも寝る時、起きる時に、佛蘭西語の辭書を枕頭におき、短語を暗誦されて居た事である、外國に居る間に佛語をものにし度いといつて居られた。歸朝後、經濟論叢誌上に出た、社會主義に關する佛語文獻の邦

譯はこの在外中の副産物であらう。又獨逸語の會話は何といつてもうまいもので、二三年通じて伯林に居る若者もとて及ばず、諧謔など手に入つたものであつた。昔の留學の尊さをしのべた次第である。

先生が伯林に見えた頃、在留して居た私達の友人が二三年前に伯林會なるものを京都で催し、先生を招待した。西洋を偲ぶといふ意味で、洋樂のレコードをやつた所が、先生少し不興だつた。そこで私は、平素私の最も好む詩を朗吟した。曰く

世人結交須黃金 黃金不多交不深

縱令然諾暫相許 終是悠悠行路心

先生はどうせられたのか、之を誤解されたい、私を拜金家、成金者かの如くいはれた。私も少々酒はまはつて居たし、大に憤慨し、「之れ位、恩師を尊敬し歡待して居るのに、その言は何事だ」と、先生に鐵拳を加へん計りの場面が現はれた。居並ぶ連中ビツクリして抑止し、その場は無事にすんだ。私は實は心外に思つたのであつた。所が、先生は翌日になつて態々來

訪され、失言の程をわびるとの挨拶であつた。私は酒間の出來事ではあるし、恐縮し、穴あらば這入り度程であつた、人間田島としての尊さは茲にもあつたと、今更の如く追慕の念已み難し。